

「高校現場ではどのような授業が行われているのか」 ～京都府立桂高等学校のアクティブラーニング型授業の事例から～

講師：西山 周平 氏(京都府立桂高等学校教諭・数学)

日時：2019年7月16日(火) 15:00～16:00

場所：深草学舎和顔館1階学生コモンズ内アクティビティホール

1. KRP立ち上げまでの経過

今年度から高校の新学習指導要領の一部先行実施が始まり、総合的な探究の時間が全ての学校で実施されていきます。桂高校ではそれに先駆けて、2018年度より学校設定科目として桂リサーチプロジェクト(以下、KRP)を設置しました。本日紹介するKRPでの最重要事項は生徒に探究プロセスをしっかり身に付けてもらうことです。

KRP実施前から、私が桂高校で担当しているクラスでは、学校外の人材育成プログラムに積極的にチャレンジする生徒が出てきていました。一方で、学校内においては新しい学力観に基づいた授業展開を十分に行えていないことを強く感じていました。そのような悩みを抱えている中で、目の前の生徒たちにこのような力を付けてやりたいと考えたことを、KRPのプログラムとして教育活動に落とし込めたことは非常に刺激的な経験でした。

私は桂高校に2016年度に転動して来たのですが、1年目の冬に管理職から、「探究型の新しい科目を設置したい」という話がありました。その瞬間、「無理でしょう」と返答したのを今でも鮮明に覚えています。当時の私には、探究型の科目をどのような形で実施すればよいかという想像が全くつかなかったからです。

2017年2月に管理職が作業部会を立ち上げて、私が部会長を務めました。2016年度は4回にわたり、担



当教員10名による会議を重ねました。それを引き継いで、2017年度は計14回の会議を開き、前年度に定めた方向性を実際にプログラムに落とし込んで内容を構築しました。そして2018年4月からKRPを開始し、今年度は2年目となります。

2. KRPの流れ

KRPの目標は、物事の本質を捉え、自主的・主体的・協働的に物事を考えること、そして探究の高度化を目指しながら、自分の考えを効果的に伝え、相手の意見を把握しながら正しく議論できるようになることです。

KRPを構築するため、基礎プログラムと探究プログラムという段階的なプログラムを考えました。1年の1学期に基礎プログラムを、2・3学期に探究プログラムを実施し、1年を通じて培ったKRPの力を2・3年の教育活動に展開

していきます。今年度は1年生の研究コース2クラスを合計8名の教員で担当しているのですが、管理職をお願いして、なるべく担当教員を入れ替えるようにし、継続的・発展的にプログラムを運営できるようにしています。実際に昨年度から4人の担当教員が入れ替わっています。また、KRPの教科だけでは難しい部分もあるので、教育企画部にKRP係が1名いて、KRPの取り組みを包括して支援しています。

探究活動はいきなり進めてもうまくいかないと考えています。KRPでは、初期指導的なプログラムを構築するために基礎プログラムを準備しており、ここでの成果がその後の探究活動を大きく左右します。そこで実際に今年度の基礎プログラムの概要を紹介しましょう。

基礎プログラムではオリエンテーション、アイスブレイキングの後、4月22日に電通のCMディレクターの絹谷公伸様を招いて、アイデアの見つけ方やクリエイティブな考え方について話をさせていただきました。この中で生徒はアイデアを見つけることを体験しました。

5月には龍谷大学を訪問しましたが、大学訪問が単発で終わるのはもったいないので、あらかじめ龍谷大学の高大連携推進室の方々と相談し、模擬講義・実験の内容に基づいた事前学習を行った上で訪問しました。

続いて、「問いづくりとは」という形で、NPO法人ハテナソン共創ラボの理事長で京都産業大学の佐藤賢一教授を招いて、アイデアをどうやって質問や問いにするかという話を聞きました。

6月には「ミニ探究」を行いました。教員が大きなテーマを設定し、小さなテーマは生徒の着眼点を引き出しながら設定して、探究プロセスを経験しました。ミニ探究の発表においては、龍谷大学の方々から貴重な指導・助言を頂きました。

探究プログラムでは、生徒たちが自らテーマを設定し、リサーチクエストを作って取り組むことを非常に重視しています。そのときに、教員が枠を与えるのではなく、



身近なものからテーマを見つけて、それを人に伝えることを重視しています。身近なものを設定することで、聞いている側も質問しやすくなるので、ただ発表して終わりではなく、いかに質問を行い、その質問にどう答えるかというプログラムにしたいと考えています。今年度のミニ探究の際には互いに質問することが十分できていなかったため、そこは強化していきたいと考えています。

本当に探究テーマは多様なので、教員の専門性とマッチすることはほぼありません。したがって、グループを担当する教員は専門性ではなく、次はこうした方がいいという大きな枠組みを示しながらファシリテーターの役割を果たすことが大事だと考えています。このような形で生徒が主体的に動くことを狙っています。

探究プログラムでは、教員が「これはちょっと」というものを生徒が計画したとしても、教員は止めない場面があることが大切です。私たちはどうしても生徒に失敗させては駄目と思いがちですが、失敗も含めて探究プロセスだと考えています。ただ、あまり考えずに失敗するのは良くありません。ある程度しっかり考えた上で、納得してやるものであればいいと私は考えています。

評価は大変ですが、授業ごとの目標に基づいて評価をきっちりと想定しておかないと、その授業でどのような力を育てるかという視点がずれてしまいます。KRP担当の先生方にはいつもプレッシャーをかけていると思いつつも、「絶対に指導と評価をセットでしなければならない」と声を掛けています。

実際に高校現場では、高校生に探究活動を行うことに意味があるのかと疑問視する声があります。KRPにおいては、振り返り・まとめを毎時間記入させたり、生徒アンケートを計4回実施して分析したり、GPS-Academicを用いてどのような力が付いているのかを、ベネッセの協力を得ながら分析しています。

一番大きいのは、生徒の状況の変容を他教科の先生と情報交換することだと考えています。数字による評価はなかなかできませんが、変容に関してはなるべくキャッチするために、研究コース推進会議を行ってリサーチしています。

まだ十分ではありませんが、生徒の状況の変容を多方面から見ていきたいと考えています。

3. 今年度の主な課題

昨年度の結果を受けて、今年度はどのような課題に取り組んでいるかということ、まずKRPは何を目指しているのかを生徒に伝えていかなければならないので、KRPのルー

ブリックの作成・運用を始めています。生徒の活動歴のポートフォリオ化に関しては、デジタルだけでなくアナログの部分も含めて、探究ファイルを作りました。評価手法に関しては、とても苦労しています。基本的には、探究プロセスに沿って、授業ごとの目標に向けて取り組んでいるかどうかを評価しています。

それから、おかげさまで大学様や企業様には多大なご支援を頂いております。この関係を大切にしながら、これからも開かれた教育活動を強化していきたいと考えております。

一方で、学校内での他教科との連携はなかなか思ったようには進んでいません。このあたりが全校体制を推進する上で大きな壁になりそうです。分掌との連携体制の強化、2年次の発展の検討も課題です。

昨年度は作業部会の段階であれもこれもという形で年間予定を計画した経緯があります。しかし、昨年度に実施してみると、生徒が自ら問い立てをるところが最も難しいと感じました。そのことを受けて、特に基礎プログラムを再構築し、アイデアを見つけて、問い作りを何度も経験させながら、問いを自分で作れるようにする改善を図っています。また、ICT機器は探究活動において大切な要素ですので、ICT機器のさらなる整備も求められます。

大きなポイントとなるのは、中学校の段階で主体学習や調べ学習を経験してきた生徒が入学してきている中で、主体学習が探究にどうシフトするのかということだと思っています。探究はなかなかうまくいかないことがあるので、やはり問い作りの部分をしっかり強化していくことが、私たちがまず取り組むべきことではないかと考えています。

今年度の基礎プログラムの改善によって、桂高校の探究型授業の向かうべき方向性が一定見えてきたと感じています。桂高校では来年度の入学生(現在の中学3年生)から、KRPの2年間の成果を生かしながら、普通科全クラスで総合的な探究の時間を実施します。

さらに、研究コースに関しては、1年生のKRP実施に加えて、2年生でもKRPを実施する方向で検討しております。カリキュラムも改編しながら、現在のKRPの内容に基づき、1年生だけで終わるのではなく、2年生でもさらに深める形でのプログラムの発展を計画しています。

私は「新しい教科を作らないか」と言われたとき、最初は「無理です」と言っていたように、生徒に自ら考えさせてテーマを作ることができるのかと正直不安もありました。でも、教員が思っている枠を超えて生徒がいろいろなアイデアを出してくれることに、シンプルに驚いています。同時に、今までそういうことを生徒にチャレンジさせてこなかっ

たことを猛烈に反省しているところです。生徒たちが探究活動を通じて成長していく姿を見て、やってよかったと感じる中で、高校の役割、大学の役割、中学の役割に関しては、先ほど紹介したような一定の方向性を考えています。

龍谷大学様には、今後も引き続きご支援いただければ非常に幸いだと思っています



質疑応答

Q1 グループ分けはどうすれば一番効果的とお考えですか。

西山 1グループ何人かというのは学校の実態にもよると思うのですが、役割がある程度全員に回るように4~5人を推奨しています。その中で、生徒が主体的にテーマ設定するため、無理に「こちらに行きなさい」と言うのは難しいので、探究プログラムに関しては若干幅が出てきます。プレゼンはポスター発表形式になるのですが、40人程度の生徒が発表し、残りの40人程度の生徒が聴く形になります。ファシリテーターは、40人に対して3~4人の教員が担当しています。

Q2 先生方が教科的に専門を担当されて、ある程度方向性があった方がいいのではないかと思います。それから、生徒へのアンケートは、選択式でしょうか。自由記述もあるのでしょうか。アンケートでは、こう回答したら聞いている側は喜ぶだろうというバイアスがかかる可能性もゼロではありません。

西山 確かにいろいろな方法はあると思うのですが、KRPに関しては80名の生徒を8名の教員で手厚く見ているので、テーマの縛りはなしで行かせてもらおうと思っています。ただ、今の形で広げるときにはどうしても運用上の難しさが出てくるので、ある程度専門性を生かしたテーマ設定という形で、ちょっと別建てで考えています。

アンケートには、記述式の欄も設け、どういう形のものが印象深いかということを書き留めてもらっています。

Q3 グループごとにアクティブラーニングをすると温度差が出てしまうことがありますが、何か工夫されていることがあれば教えてください。

西山 テーマ設定を進めている段階で、自分の事になるべく近づけられるようにするための時間をしっかり取り、このアイデアのいいところ、そうではないところをいろいろ出し合いながら、グループ内で共有しています。その中で、「自分は絶対にこれがしたい」というものであれば、そちらに行ってもらっていいという形にしています。ただ、人数が1人だけになるとまずいので、なるべくグループから出てきた探究テーマだという形になるようには工夫したいと考えています。そういう形でやると、1人だけが引っ張って、他がついてきていないという状況もあまりないと思います。

Q4 ファシリテーターはどれくらい介入した方がいいのでしょうか。

西山 私たちの専門の内容が出るケースが多いので、その流れは大丈夫なのかといった質問はしています。そのときに、答えが出てこなかったら、「ここの先生に聞きに行ったら？」という話はしています。あとはなるべく生徒たちが自分で考えてやるようにしています。

Q5 生徒が活発になっていく姿をどのように共有されているのでしょうか。生徒へのアンケートと研究コース推進会議のリンクはどうなっているのでしょうか。

西山 アンケートの結果を実施に十分つなげられてはいま

せんが、発表したり話し合いをしたりすることは実際に授業内でやっていて、推進会議の中では、このクラスの生徒の強さはどの辺にあるのかということを経験を教科担当で共有しています。

Q6 具体的にどういう形で評価されたのでしょうか。

西山 こちらが指示したワークをしっかりと取り組んでいれば一定以上の評価は付けています。その中で授業の目標を理解しての的確な取り組み・表現ができていたらさらに高い評価を付けることにしています。授業の最初に、この授業はこういう力を付けてほしいということをしっかり言っています。

Q7 最終発表では「龍谷大学の先生方に講評を頂きました」とありましたが、先生方に講評を頂く前に、プレゼンテーションを聞いた生徒にコメントを求める時間をつくったりはしないのでしょうか。それがないと、本当のインタラクティブなアクティブラーニングにならないと思います。

西山 ポスター発表の時間に、生徒は質問内容などの聞き取りシートを準備しているので、発表を聞いて感じたことを質問したり、何か交流したりするように指導しています。



FDサロンレポートとは

学修支援・教育開発センターでは、教職員間の交流の場として、各種の教育活動の経験や意見が話し合えるように「FDサロン」を2002年10月から開催しています。

学修支援・教育開発センターが、話題提供者をコーディネートし運営しています。当初は話題提供者のお話に耳を傾け、お茶でも飲みながら自由に意見交換等が行える機会として開催してきました。しかし、開催時間や開催場所の関係から、参加ができないとの声も聞かれました。そのようなことから、FDサロンでの話題を全学に普及させ、より一層FDの取り組みを深めていくためにFDサロンレポートを発行しています。

FDサロンレポート 19-1

発行日：2019年9月

発行：龍谷大学 学修支援・教育開発センター

〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町 67

TEL.075-645-2163 FAX.075-645-2190

<http://www.ryukoku.ac.jp/faculty/fd/index.html>